

「質問一応答」連鎖で繰り返して質問すること

ー 連鎖の後方拡張を中心にー

梁 勝奎（名古屋大学大学院生）

1. はじめに

日常会話でよく見られる質問-応答連鎖では、質問に対する応答が産出されるとその連鎖は完了可能点に到達する。しかし、質問者がそこで会話を完了せず先行発話で産出した質問を再び産出して受け手に応答を要求することで連鎖を拡張する場合もある。本稿ではこのような質問-応答の連鎖で応答が産出されたにもかかわらず、質問者が再び質問することでその連鎖を後方に拡張することに注目する。再び質問することで受け手に応答を求めるこのプラクティス(実践)がどのような相互行為的働きをしているかを会話分析の方法を用いて明らかにすることが本稿の目的である。

2. 先行研究

連鎖の後方拡張(post-expansion)に関して、Schegloff(2007)は大きく「最小限の後方拡張(minimal post-expansion)」と「最小限ではない後方拡張(non-minimal post-expansion)」に分類した。この分類に基づいた連鎖の後方拡張に関する多くの研究では、第二成分で選好する(preferred)反応が行うと連鎖をそれで終了させるか、最小限の後方拡張だけが行われる傾向があると指摘され、好まない(dispreferred)反応や、質問に適合しない反応が産出された後には最小限ではない後方拡張が行われると指摘されていた(Davidson, 1984; Schegloff, 2007; Liddicoat, 2011 など)。

しかし、質問-応答連鎖で再び質問することで最小限ではない後方拡張を行うのは必ずしも質問に適合しない反応や好まない応答の後にだけ産出されるのではない。質問に対して適合する応答や選好する応答の後にも連鎖の最小限ではない後方拡張が行われ、受け手の反応を求めることがよく見られた。本研究では従来の研究で行われた質問に適合しない応答の後の連鎖の拡張とともに、質問に適合する応答の後に行われる連鎖の後方への拡張についても考察する。

3. データ

本研究では筆者が独自の収録した日常会話のデータと、The talk bank project (MacWhinney, 2007) にて配布されている「Callfriend Japanese Corpus」, 「Callhome Japanese Corpus」を用いて本研究の研究対象になる現象を収集し、応答の後に質問することを形式的に「質問を繰り返す」現象と「質問をやり直す」現象に分類した。

本稿では第一成分で産出した質問を第三の位置で新しい要素を付け加えずに全体またはその一部を繰り返すことを「質問の繰り返し」と言い、第一成分で産出した質問に新しい要素を付け加えたり、新しい発話形式で第一成分と同じことを質問したりすることを「質問のやり直し」と言う。また、位置的には、第一成分の質問に「適合する応答」の後に再び質問するケースと、「適合しない応答」の後に質問を産出したケースに分類した。質問に「適合する応答」ということは、質問が制約する応答の形式に当てはまる応答を意味するが、これは「選好する・先行しない」応答のことを表すのではない。質問に「適合しない」応答とは質問にたいしてうまく答えずに応答を回避するように見えたり、質問が制約する応答形式に違反する形の応答を産出したりすることを意味する。このような分類に基づいて本稿では(1) 質問に適合する応答の後に質問を繰り返す、(2) 質問に適合しない応答の後に質問を繰り返す(3) 質問に適合する応答の後に質問をやり直す(4) 質問に鄭号しない応答の後に質問をやりなおす、の4つに分類し、分析を行った。

4. 分析

4.1. 質問に適合する応答と繰り返し

応答の後に同じ質問を繰り返して産出するということは、第一成分である質問に対して産出された応答を受け入れることを保留し、応答者に再び確認を求めることである。断片 1 は友達同士の電話会話場面で、アキラはカズヤに成田空港から東京都内の新宿まで行くのにどのくらい時間がかかるかを聞いている。

断片(1) [Callfriend_JAPN_6166_22:28~]

01 アキラ: u:m>どれぐらいかかるの?<
02 (0.4)
03 カズヤ: .hh[hh
04 アキラ: [一時間ぐらい
05 (0.5)
06 カズヤ: まず#:::#日暮里まで一時間だろう?
07 (.)
08 アキラ: あそんなにか(h) るんだhh.=
09 カズヤ: =50 何分°#とか(だよね) 確[かに#°
10 →アキラ: [スカイライナーで?
11 (0.2)
12 カズヤ: °#う:ん#°.
13 (0.3)
14 →アキラ: スカイライナーで?
15 (0.2)
16 カズヤ: スカイライナーでね
17 (0.3)
18 アキラ: 五十分かかんの?
19 (0.2)
20 カズヤ: そうだよ.
21 アキラ: うわhhh (0.9) マジか(h)いhh.
22 (0.5)
23 カズヤ: HHhh き[み(0.3)使ったときないの?
24 アキラ: [うん.
25 (0.3)
26 アキラ: ああ:,ずっと使ってっけど覚えてねえよ.

その後、カズヤが23行目でスカイライナーを使ったことがないかを聞くと、アキラが26行目で「ずっと使ってっけど」と発話して自分もスカイライナーを使っていることを表明してから「覚えてねえよ」と発話して所要時間がどのぐらいだったかは記憶が不確かだと述べる。この26行目の発話から見ると、14行目で10行目の質問を繰り返したことはアキラがスカイライナーの所要時間について完全に知識がなかったということではないので、自分が想定していた時間と、カズヤが答えた時間の違いが原因となり、質問を繰り返して応答を受け入れることに保留し、カズヤの応答に問題がないのかを確認したと考えられる。このように、質問に適合する応答の後に質問をそのまま繰り返すことで応答に何か問題(または間違い)がないかを確認することが見られた。

4.2. 質問に適合しない応答と繰り返し

質問に適合しない応答が産出された後に再び質問が産出されるプラクティスは本研究のデータで2例が見つかったが、厳密には質問の繰り返しだけではなく、応答に対する新しい質問として産出した可能性も含んでいると思われるものであった。

断片(2)は友達同士のメグミとリラの電話会話場面である。01行目でメグミはリラと共通の友達であるユウコと仲違いしてしまい、一緒に遊ぶ人がいないと言う。それに対してリラが03行目で自分もユウコを敵に回したと告知する。この発話を

空港から新宿までどのぐらいかかるかという01行目のアキラの質問に対して、06行目でカズヤは成田空港から東京の日暮里駅まで1時間ぐらいかかるかと応答する。その次の順番である08行目でアキラが知識状態の変化標識(Change of state token)である「あ」(Endo, 2018)を冒頭で発話してから「そんなか(h)かるんだhh」と発話することで自分の予想より時間がかかるということを表す。そして、10行目で「スカイライナーで」と質問し、スカイライナーという具体的な列車の名前を出すことで、カズヤが話しているそのルートが空港から東京までの特急列車である「スカイライナー」を利用した場合にかかる時間なのかを確認する。この質問にカズヤは「°#う:ん#°」と応答することで、スカイライナーで移動しても五十何分はかかるということを表す。その応答の後、アキラは「スカイライナーで?」と発話することで10行目の質問を繰り返している。

この断片の1行目から9行目までの成田空港から東京都内まで行く方法や所要時間について、アキラはカズヤより知識がないスタンスを見せている。それにもかかわらず、14行目で10行目質問をそのまま繰り返して再び質問を産出し、カズヤに応答を求めるということは12行目で産出されたカズヤの応答を受け入れることを保留し、12行目の応答に何か問題があるのではないかと確認していると分析することができる。

しかし、カズヤは16行目で「スカイライナーでね」と応答することで12行目と同じスタンスを見せることで、自分の応答には問題がないことを主張する。この応答の後、アキラは五十分かかるかを再び確認し(18行目)、それに対してカズヤが20行目で確認を与えたらアキラが21行目で「うわhhh (0.9) マジか(h)いhh。」と発話することで自分の想定と違ったということを表している。この21行目の発話でようやくアキラはカズヤの応答を受け入れてようとしていると認識できる。

断片(2) [Callhome_JAPN_0696_00:11:02]

01 メグミ: >なんかさユウコとかもさ:敵に回しちゃって今さ:<
02 : も[うどう°すること-°
03 リラ: [>私も敵にまわしちゃったの<
04 →メグミ: なんで?
05 (0.7)
06 リラ: u::hm ま-(.) なんか (0.2) ¥それ::は今度手紙に書くよ huh¥.
07 →メグミ: なん[で::?
08 リラ: [今日書くから.
09 (0.6)
10 メグミ: うそ=書いて::::

聞いたメグミが 04 行目で「なんで?」と疑問詞を用いて質問することでなぜユウコを敵に回したか理由を聞いている。しかし、リラは 04 行目の質問に対してすぐ応答せずに 0.7 秒の間をおいて (05 行目)、発話の冒頭に「u:hm」と発話したり、「なんか」と発話してから 0.2 秒の間を置いたりすることで応答を産出することを遅延させてから「それ:は今度手紙に書くよ hnhuh」(06 行目)と発話する。言い淀むことと沈黙を置いてからこの場ですぐ答えるのではなく手紙で書くということから、リラがユウコと仲が悪くなった理由をデリケートなことだと扱っていると分析することができる。このような応答方法でリラは 04 行目の質問に適合な応答を産出することを回避している。リラの応答に対してメグミは 07 行目で再び「なんで:~?」と 04 行目の質問を繰り返す。これを通じてメグミは 06 行目のリラの応答に受け入れないスタンスを示し、質問に回避する応答に対して、再び応答を追求している。ただし、この質問は理由を聞く「なんで」という疑問詞だけを使った質問であるため、06 行目の「ここでは話さずに手紙で書く」理由を聞いているようにも見える。07 行目のメグミの質問に対してリラは 08 行目で「今日書くから」と発話することで「ユウコを敵に回した」理由を聞く質問についても、「今はなさに手紙で書く」理由を聞く質問についても適合しない答を産出する。しかし、メグミが 10 行目で「うそ=書いて::ふ」と発話することでその応答を受け入れているので 07 行目でメグミが 04 行目を繰り返していたのか、06 行目に関する新しい質問を産出したのかは明確ではない。このように質問に適合しない応答の後に質問を繰り返すことは第二成分で産出した反応をなかったことにし、同じ質問に再び反応を追求していることが見られた。

4.3. 質問に適合する応答と質問のやり直し

質問に対して適合する応答が産出された後の位置で、質問者が第一成分で産出した質問をやり直すことは、質問のやり直しにより質問をより明確にすることで、一度は第二成分が産出されたにも関わらず、まだ尋ねたことについて質問者が理解できていないことがあるということを提示している。これを通じて、質問者は応答者に自分が要求する情報を含む応答を提示することでベース連鎖の第二成分で産出された応答では物足りないことを表す。このようなプラクティスを実際の断片を用いて確認していきたい。断片(3)では最近引っ越したフミコが妹のカオリを家に招待している。フミコの新しい家について詳しく知らないカオリはフミコの家状況について質問している。

断片(3) [Callhome_JAPN_1461_00:26:25~]

01 カオリ: 私がそう-例えば行ったとしたらさ:

02 フミコ: うん.=

03 →カオリ: ~~部屋あるの?私の~~.

04 フミコ: え?あるよ.

05 (1.0)

06 →カオリ: まるまる空いてんのま[る-

07 フミコ: [まるまる空いてる.

08 (0.5)

09 カオリ: ふ::ん.何畳ぐらい?

10 (.)

11 フミコ: .hhhhhhh 八畳.六畳から八畳.

01 行目でカオリがフミコの家に行くということを仮定している。そして、03 行目で「部屋あるの?」と質問することで自分が使える部屋の有無を尋ね、間を開けずに「私の」を付け加えることで自分が泊まる部屋があるかどうかを質問する。この質問に対してフミコは「え?あるよ。」と応答することでカオリが使える部屋があると応じている(04 行目)。

03-04 行目の連鎖は問題がないように見えるが、03 行目のカオリの質問で触れられている「私の部屋」という語彙が示しているのは「他の人(例えばフミコ)が使っている部屋だけど、カオリも泊まれる部屋」を示しているようにも聞こえるし、「カオリ一人で使える個室」を示しているようにも聞こえる。しかし、フミコの「あるよ」という 04 行目の応答は上で述べた二つの意味のうち、どちらに当てはまる応答かは明らかではないが、フミコは 03 行目のカオリの発話を問題があるものとしては扱っていない。

04 行目のフミコの応答の後、06 行目でカオリは「まるまる空いてんの」と質問することで、他の人が使っていないなくてまるまる空いている部屋があるかを聞く。つまり、03 行目の「私の部屋」があるかという質問と、06 行目の「まるまる空いている部屋」があるかという質問は両方ともカオリが「一人で使える部屋」の存在の有無について聞いている同じ質問である。従って、06 行目のカオリの発話は 03 行目と同じことを聞いている質問であるが、03 行目の「私の部屋」を明確にすることで、質問では明らかではないところをより明確にすることで質問をやり直していると分析することができる。このようにカオリは 06 行目で自分の質問をやり直して 03 行目の質問を再産出することでこの 03-04 行目の質問-応答連鎖で知りたかったことが第二成分の応答では足りないことを表し、応答者に再び応答を要求している。

4.4. 質問に適合しない応答と質問のやり直し

第二成分の位置で質問に適合しない応答が産出された場合に行われる二回目の質問は、応答者が自分の質問に適合する応答を産出するように反応を追求していると考えられる。断片(4)は研究者同士であるヒロシとタクヤの電話会話場

面である。通話が始まる前に、研究のため、この通話は録音されているというアナウンスが流れた。断片の直前にタクヤがどのような話をしたらいいかヒロシに聞いた。そしてヒロシはタクヤのところに送った論文について話し始める。

01 行目でヒロシは論文が届いたかどうかを尋ね、03 行目でタクヤは届いたと答える。ヒロシが 04 行目で「どうですか?」と送った論文について聞く。この質問に対してタクヤが 06 行目でまず「うん」と発話することで質問を受け入れたことを表すが、その後すぐ発話を産出できずに「あれ:::」と言い淀んでいる。それを聞いたヒロシは 07 行目で 04 行目の質問を「なんか:(.)ありますか?」と質問を変えて、論文について何か言いたいことがあるかと聞く。それに対してタクヤは 09 行目で「そこそこ」という表現を使って細かい問題はあるかもしれないが、全体的には良いという評価をする。この評価に対してヒロシは 11 行目の冒頭で「う:ん」と発話することでタクヤの応答を受け入れるように見えるが、すぐ「でも」と付け加えることでタクヤの応答に何か抵抗することを表し(Mori, 1999), 07 行目の質問を繰り返して産出するが、11 行目の質問をそのまま繰り返すのではなく、「質問」という語彙を発話の中に入れて、「う:::んでも なんか:::質問ありますか?」と質問する。この発話を通じてヒロシは 07 行目の質問で求めていた反応は 09 行目のような大まかな評価ではなく、論文に関する質問だったということを表すことでタクヤに再び反応を要求している。12 行目の質問の後、タクヤは「う:::んとね::」と発話したり、0.3 秒の間を置いたり、「え::: t」と発話したりして言い淀んだ後、14 行目で「これからの展開をどうするかですね」と発話することで質問をしようとしている。07 行目でヒロシが産出した極性疑問文を用いた質問にタクヤは「はい」または「いいえ」の応答や、「ありますか?」に対する何かを発話するなど、07 行目の質問に適合する応答を産出しなかった。そのため、ヒロシは 11 行目で「質問」という言葉を入れて 07 行目の質問をやり直すことでタクヤに質問に適合する応答を求めている。その後、実際にタクヤは質問を産出してはいるが、14 行目で 11 行目のヒロシの質問に沿う反応を産出しようとしたことでヒロシの反応の追求に対応していると分析できる。

断片 (4) [Callhome_JAPN_1418 00:00:14~]

01 ヒロシ: 例えば論文届いたんですね:。
02 (0.5)
03 タクヤ: あ届きました届きました.=
04 ヒロシ: =どうですか?
05 (0.3)
06 タクヤ: うん.h(.).あれ:::[(いい っす)]
07 →ヒロシ: [なんか:(.)あ]りますか?
08 (.)
09 タクヤ: そこそこいいですね:
10 (0.3)
11 →ヒロシ: う:ん でも なんか:::質問ありますか?:?
12 タクヤ: .hh う:::んとね:: (0.3) え::: t
13 (0.3)
14 タクヤ: て-これからの展開をどうするかですね:
15 ヒロシ: う:ん.

5. おわりに

再び質問することは全部同じ活動をしているように見たが、詳しく分類して分析すると、応答の形や質問の形式によって異なる働きをしていることが分かった。

質問に適合する応答の後に産出される質問は産出された応答を確認したり、不確かな部分を明確にしたりする働きをしていることが見られたが、質問に適合しない応答の後にはそれよりもまず、質問に適合する応答が産出されるようにしていることが分析の結果明らかになった。

本稿では再び質問するときの質問形式だけに注目したが、それと共に行われるジェスチャーや視線の動きなどの資源が再び質問をすることについてどのように使われているかについてはこれから続けて研究を進める必要がある。

参考文献

- Davidson, J. (1984). Subsequent versions of invitations, offers, requests, and proposals dealing with potential or actual rejection. *Structures of Social Action*, 102-128.
- Endo, T. (2018). The Japanese change-of-state tokens a and aa in responsive units. *Journal of Pragmatics*, 123, 151-166.
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017). 会話分析入門 勁草書房.
- Liddicoat, A. J. (2011). *An Introduction to Conversation Analysis*. Bloomsbury Publishing.
- MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J.C. Beal., K. P. Corrigan. and H. L. Moisl. (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. (pp.163-180). Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Mori, J. (1999). *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese*. John Benjamins
- Schegloff, E.A. (2007). *Sequence Organization in interaction: A Primer in Conversation Analysis1*. Cambridge University Press.